

「ありがとう」それは、魔法の言葉。感謝を伝える時に使う、たった五文字の言葉は人の心を温かくする、誰もが自由に使うことが出来る魔法であると思ふ。

一日の中で、何度この魔法の言葉を使うことが出来るか私は一人静かにチャレンジしてみた。家を出て、駅の自転車の整理をしてくれるおじさんに「ありがとう」と言った。「いつてらっしゃい。頑張ってるね。」と手を振ってくれた近所のおばあちゃんに「ありがとう」と言った。電車を降りて改札の駅員さんに「ありがとう」と言った。学校で、私の荷物を持ってくれた友達に「ありがとう」と言った。

沢山の「ありがとう」が日常にはあふれていると私は改めて思った。

「ありがとう」この五文字は伝えた方も、伝えられた方も幸せな気持ちになれる魔法の言葉だ。私は魔法使いだと思つた。

誰でも魔法使いになれる。でもこの魔法の言葉を使いたくない時もある。

例えば友達や親と喧嘩をした時。イライラした時に

は、不思議と誰でも使える簡単な魔法が使えない。

この魔法は心が穏やかで素直な時にしか使えないことに私は気づいた。何時でも何処でも誰でも使える魔法を使いこなすには、心の整理整頓が大切ということだ。

これに気づいた日から、心が少し荒れた日も、親に腹が立った日も、心の中の整理整頓を心掛けるようにした。大好きなバレエを踊ったり、楽しいことを考えると心の整理整頓が出来ることに気がついた。

心が整つと又、魔法は使える。

人々を幸せにする。たった五文字の魔法はなんて凄いららう。感謝の言葉が世界中に広がると、国籍や文化など関係なく心がつながることが出来ると思ふ。

私には認知症のお婆ちゃんがいる。

まだ私が小学生の頃、お婆ちゃんは自分のことが自分で出来なくなった。同じことを何度も聞いて来たり、ご飯の作り方がわからなくなりお母さんがお婆ちゃんのお世話をしていた。私はまだ小さかったのでお母さんをお婆ちゃんに取られた気持ちだった。

い出し、お婆ちゃんに会いに行つて良かったと心から思った。

私は、お婆ちゃんから「ありがとう」という魔法をかけられた気持ちになった。

私も、沢山の人に魔法をかけたと思う。そして、みんなを優しい気持ちにしたい。そう、私の心に強く誓つた。

気づくと、いつの間にか私はお婆ちゃんのことを嫌いになっていった。しかしその気持ちは誰にも言えずに心にしまっていた。

やがてお婆ちゃんは認知症がひどくなり、介護施設で生活することになった。

時々、家族で会いに行つてお話をしたり一緒に歌を歌つたり学校の様子なども教えていた。しかしコロナウイルスが流行しはじめて面会が出来なくなった。会えなくなり半年くらいすると、「ガラス越しなら面会が出来ますよ。」と施設の人に言われ会いに行くと、私より小さくなったお婆ちゃんが肩を揺らしながらガラスの向こうで泣いていた。

何も言わず、ずっと私の顔をみて笑つたり泣いたり。その姿を見てその場にいた全員が泣いた。私がガラスに手のひらを当てると、お婆ちゃんも私の手に合わせる様に手を当ててくれてガラス越しにタッチをした。

そして、「ごね…ありがとう」と言ってくれた。おさまりかけた涙が又、あふれて来た。久しぶりのお婆ちゃんの声は、かすれて小さかったけれど、ありがとうと言ってくれた。今までお婆ちゃんのことを嫌いだったことを後悔した。

私はこんなにも愛されていたんだと気づき、小さい頃に、沢山遊んでくれた優しいお婆ちゃんのことを思

